

# 「学生による語り合いのシンポジオン」について

シンポジオン世話人会 14.09.01、17.06.01、18.4.26

この稿は、シンポジオンとは何かについて、**趣旨、様相、実績、Q&A**、でもってご説明するものです。必要などころを選択してお読みいただいても結構です。ちょっと長いですが、見てください。なお、文中の学会は日本建築学会のことです。

## ■■ 1. 趣旨 一般論として

近年、豊かさを求めると声高に叫ばれていても、社会の閉塞感がますます強まり、建築を取り巻く環境もまた一段と厳しさが増えてきております。こうした現状を踏まえて明日の建築をつくるには、建築の根源に立ち返って明日への活力を醸成することが肝要であり、若い力に大きな期待が寄せられております。

こうしたなかで、学生の皆さんは、「だからこそ日々の日常活動を大切に」と考え、自らの設計、まちづくり、すまいづくり、種々ボランティアなど、旺盛なチャレンジ精神で主体的に精力的に活動し、多くの方々との熱い討議を熱望しております。

そこで、我々は大会期間の中日にシンポジオンという討議の場を提供することにしました。学生の皆さんおよび職業人（研究者・教育者・実務者）のみなさん、大いにコミュニケーションを楽しむことにしてはいかがでしょうかと考えました。シンポジオンでは、単なる（ボランティア、研究・デザイン・ワークショップの）発表の場とするだけにとどまることなく、参加者全員が「学生の志を育む」という立場で自由に交流・討議し語り合いを楽しむことにしたのです。

## ■■ 2. 経緯

私どもは、実務系会員の学会離れに少しでも歯止めがかかればとの思いで、「実務者と 教育・研究者との懇談会」を企画し、学会大会関連行事として02年大会より大会開催支部の協力を得て実施してきております。企画そのものの認知度が低いにもかかわらず、全国から将来を憂う方々が集うて熱く討議しており、皆様方から細々ながらも大きな期待を「集い」に寄せていただいております。

07年度からは、この種の企画を発展させて、学生と大人(実務・研究・教育)との交流を念頭におき「学生がもつ将来に向けての志を育てる」という意図で、「学生による語り合いのシンポジオン」を毎年開催し、大変好評をいただいております。特に、最近では学部生にも門戸を広げ、一般市民も交えての知的交流を行ない、今日まで続けております。

## ■■ 3. 世話人会

この企画を毎年継続して行いために、趣旨に賛同して積極的に企画を推進する方々で世話

人会を作っております。実際の運営は学生の皆さんが行いますが、大人の方々は彼らを後方支援する形でお世話いたします。

現在、世話人は各地域に数名、全国トータルで20名ほどいらっしゃいます。その代表を世話人代表としております。10年からは、学生が代表世話人に就任しております。

なお、会は建築学会員で構成された任意の団体です。

## ■ ■ 4. 様相

### ■ テーマ

毎年、話題性のあるテーマを設定して、各立場の方が参集できるようにして、上記趣旨のもとでのシンポジオンとしています。

### ■ 参加者

参加者は話題提供学生と討議者の二種類の方々に構成されます。話題提供者は主に大会開催地域の大学・短大・高専等の学生といたします。OBも参加が可能です。ただし、話題提供学生はグループ参加といたします。〇〇大学チームとか言うように。どうしてもグループを組めない場合も出てくるかと存じますが、そのときは相談に応じています。

討議者は、大人の方々にいわゆる職業人として全国の実務者、研究者、教育者に加えて市民の方もはいます。また、話題提供者もときとして、討議者となっていただきます。

### ■ プログラム 例年以下のようにしております。

14:00-14:10 開会挨拶、主旨説明 14:10-15:30 発表（1 チーム 10 分程度）

15:30-16:45 フリー討議（聴衆が各チームのテーブルに出向き、話題提供者と自由に討議）

16:45-17:00 各チームまとめ、全体のまとめ

### ■ 自由討議

各自のプレゼンが終わり次第、自由討議に入ります。例年は二種類のパターンのいずれかで行っています

・第一モード：話題提供学生チーム毎に島テーブルを設け、島の上に写真や地図・図面などをおき、やって来る討議者と討議します。立ち席とします。討議者は、チーム側の誰でも捕まえて時間を気にせず自由に討議をします。

・第二モード：上記の場合で立ち席でなく着座式とします。討議者は関心あるチームの島に出向き、他の討議者と共にチームの方と討議します。ただし、着座 30 分をワンクオーターにして討議者は 30 分ごと着座をシャッフルいたしまして他の島を渡り歩きます。

・第三モード：提供された話題をざっくり 4, 5 個にクラス分けして、第二モードと同じスタイルで討議します。

### ■ コメント

基本的には参加のための経費はまったくかかりません。

資料については、話題提供学生自身に印刷・持参していただいております。

## ■ ■ 5. 実績

これまでの8年間、45チーム、350人参加

2007年 福岡大学 参加チーム6、参加者60人(うち職業人10人程)

「学内外における学生主体の建築活動」

2008年、近畿大学(広島) 参加チーム5、参加者60(職業人10人程)

「若者の活力を明日につなげる」

2009年、東北文化学園大学 参加チーム5、参加者35(職業人11)

「地域の諸問題を対象とした設計・制作活動」、

2010年、富山大学 参加チーム6、参加者60(職業人10)

「地域の想いをかたちに」、

2011年、早稲田大学 参加チーム4、参加者25(職業人10)

「私たちにできることは」、

2012年、名古屋大学 参加チーム6、参加者50(職業人9)

「建築の原点に戻る」、

2013年、北海道大学 参加チーム5、参加者35(職業人12)

「学内外における学生主体の建築活動」

2014年、神戸大学 参加チーム4、参加者25(職業人11)

「学内外における学生主体の建築活動」

2015年、東海大学 参加チーム3、参加者15人程(職業人4)

「学内外における学生主体の建築活動」

2016年、福岡大学 参加チーム5、参加者10(職業人2)

「学内外における学生主体の建築活動」

2017年、広島工業大学 参加チーム4、参加者22(職業人6)

「学内外における学生主体の建築活動」

2018年、東北大学 参加チーム\*、参加者\*(職業人\*)

「学内外における学生主体の建築活動」

## ■ ■ 6. Q&A

シンポジオンの趣旨を一層ご理解頂くために、過去によせられたものを掲載します。

Q：学会大会の研究発表やデザイン発表とどこがちがうのか。

A：シンポジオンの場は、発表者が研究成果や設計作品を公表して評価をいただくという研究やデザインの発表の場ではありません。多彩かつ多様な方々とのコミュニケーションを学生のプレゼンを介して皆さんで楽しむ場です。場におけるコミュニケーションは、学生の活動内容の紹介という狭いものに留まることなく、学生および職業人の人間性をも含めたものとして一味も二味も違う奥深いものとなります。

Q：研究室単位で発表する意味はどこにあるのか

A：自主活動している学生グループが少なくなったとはいえ、その一方では、たとえ研究室配属の学生でも研究室のテーマに沿って研究活動していても、自主活動の心意気をもっておられます。彼らのそうした心意気をもっともっと引き出すこともまた大事な使命かと思えますので、彼らの参加を大いに期待している訳です。

Q：課題の講評会とはどこがちがうのか。

A：シンポジオンにて学部生が授業課題について話題提供するような場合は、学内で実施の講評会に各地から先生方が多数出席されているだけではと受け取られがちですが、違います。前述 Q のように、シンポジオンでは課題に対して評価を得ようということではなく、たとえ授業課題という土俵であっても、そのなかで育まれた自主的創作の精神は、学生同士はもちろんのこと教育・研究者(職業人)との世代間コミュニケーションとして、共有財産となっていくべきものです。語り合いだからこそ、そうしたことができると考えています。

Q：テーマはいつも幅広いが。一般のシンポジウムではテーマをかなり絞っているが。

A：学生の主体的な活動は、計画系から構造系まで多岐にわたっています。そうした広がりなかで交流することが目的ですので、必ずしもテーマを絞る必要はないと考えています。ただし、学生のニーズや話題性なども勘案して絞ることもあります。絞る必要はないよう、狭い領域での交流にならないよう心がけています。

Q：テーマが広範囲なら、議論しにくいのでは。

A：学生には、広い視野を身につけて欲しいものです。この分野は私に関係ない、といった狭い考えを払拭するためにも、種々のことに関心を持ち好奇心を醸成していただくためにも、守備範囲は多様で広範囲を必要とします。議論するための議論ではなく、好奇心醸成は学生のみならず、職業人も心がけたいものです。

Q：交流なら、他の団体でもやっているし、学会がやらなくてもいいのではないのか。

A：学生間の交流を地域に限定して行うのも大事ですが、大会に参加する教育・研究・実務のしかも多才かつ最先端で活躍しておられる方々(職業人)との交流が、学生の志育成や逆に職業人の活力増のためにも欠かせません。加えて学生同士の交流もまた、建築学会ならではの交流となります。ちなみに、交流とはこなれて混じりあうことと考えております。

Q：なぜ、語り合いとなっているのか。討議では。

A：討議というと、すぐに「討議する側」と「される側」がある程度のポテンシャルを有していなければならず、学生にそんなことができるのか、といった声をよく聞きます。評価を得るための討議ではなく、人間対人間のふれあいという意味を持たせた討議ですので、こ

ここではあえて「語り合い」ということにしました。討議の場にポテンシャル必要という一見正しそうな捉え方があるかぎり、「語り合い」という言葉を今後も使用していきます。専門外の人は黙って、といったことが無いようにしたいものです。

Q：「学生による」ではなく[学生のための]では。

A：「学生による」とあるように、会の運営は学生主導で行われております。また交流は、学生同士はもちろんのこと職業人との交流も含まれています。文字通り「学生による」をモットーとしているのです。

Q：「シャレット」とどこがちがうのか。

A：大会の学生向けの企画としてシンポジオンの他に「シャレット」という企画があります。これは、都市計画委員会が主導し、「学生と地域との連携としてのまちづくり」を大会開催の特定地域にて実際にWSの形式で行い、大会時にその成果を発表するものです。シンポジオンは、まちづくりも含めて種々様々のテーマで全国各地の問題を学生自身が持ち寄って、学生同士や市民・職業人と語り合うことが特徴です。まちづくりについても、地域間交流、世代間交流を図るものですので、シャレットとはスタンスが全く違います。

Q：学生に知的交流が必要か。

A：学生の学びにはもちろん教室が中心ですが、地域というフィールドの必要性も言うまでもありません。私たちは、特定の地域だけに限定するのではなく、自分らとは別の学生達や社会人達とで互いに繋がるのが、社会というフィールドでの学びの交流と捉えています。